



大阪公立大学共同出版会

No.26

NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目 次

- OMUP理事長 新春のご挨拶 三田 朝義 …… 1
- OMUP新春インタビュー
公立大学法人大阪市立大学 森 一彦教授
インタビュアー：常務理事 足立 泰二 …… 2
- 自著を語る (7)
永遠の課題「リアリティの共有」に小さな灯をともし
—『紛争と共感のリアリティ』の語るもの—
和田 安弘 …… 4
- 新刊書の紹介 …… 5
- 第26回 OMUPサロンの報告 …… 5
- 第27回 OMUPサロンのお知らせ …… 5
- 新入生と図書館をつなぐ『読ン得本々』
大阪府立大学学術情報センター 赤崎 久美 …… 6
- 新顔紹介 …… 6
- 大阪公立大学共同出版会事務局より …… 6
- 編集後記 …… 6

OMUP理事長 新春のご挨拶



OMUP理事長 三田 朝義

大阪公立大学共同出版会（OMUP）会員の皆様、新年をお健やかに迎えられたことと存じ上げます。OMUPは起伏の年月を経ながらも創立13年目を迎えることができました。これもひとえに会員の皆様のご支援の賜と感謝申し上げます。

一昨年3月に東北地方を襲った前代未聞ともいえる大震災と大津波、さらには人災に近い原発事故から一年以上経た今も暗闇を彷徨している状態が続き、そこから政治的不信感が生まれ、さらには最近の緊迫する東アジア情勢を反映したためか、ダッチロール状態から右旋回しつつあるわが国の先行き状態を考える時、会員の皆様には冒頭の新年の挨拶が空虚に感じられるかもしれません。ともあれ、“モノ”の本質を捉えることができず皮相の出来事に右往左往するカオス状態に陥った私たちが、近い将来“日本人とは何か”と冷静に考

えられる日が来ることを願っています。

昨年末、OMUPの会議のため久しぶりに乗った通勤列車の中で携帯電話の林立している光景に出会い仰天しました。一方、以前はよく見られた本や新聞を読んでいる姿をほとんど見ることはありませんでした。これは昨今の高い無読率の上昇と大いに関係していると考えることができないでしょうか。これはまた、五感を司り“音楽脳”とも呼ばれる右脳の発達を促進させることとは裏腹に、思考・論理を司り“言語脳”とも呼ばれる左脳を退化させ、言い換えれば思考力や想像力を低下させ、さらには活字文化の崩壊に繋がるものと危惧しますが、会員諸兄姉はどのようにお考えになりますか。活字文化は人間文化の根幹をなすものであり、古くはエジプトのロゼッタ・ストーン、古代中国や日本の文書木簡に象徴されるように人間文化の発展を支えてきたものではないでしょうか。私たちの出版会もささやかではありますが、これまで地域社会の学術文化の発展の一端を支えてきたものと自負しています。一方、学術文化の発展に寄与する良書を継続して出版しなければならないことも当然のことと思っています。

新年の挨拶とはとても言えないような駄文を列挙しましたが、会員諸兄姉の皆様におかれましてはOMUPにいつものご支援を賜りますようお願い申し上げます。

OMUP新春インタビュー

大阪市立大学都市防災研究プロジェクト(ODRP)長
大阪市立大学院生活科学研究科

もり かずひこ
森 一彦 教授

インタビュアー
OMUP常務理事 あだち たいじ
足立 泰二



森 一彦 教授

今年に賭ける二つの課題

足立常務理事: 新年明けましておめでとうございます。OMUP新春インタビューをご快諾いただき有難うございます。本年のご抱負をお聞かせいただけませんか。

森 教授: 明けましておめでとうございます。私の本年の課題は2つあります。一つ目は、私が研究代表の大阪市立大学重点研究「都市防災研究プロジェクト」で、二つ目は国土交通省の補助事業で「泉北ほっとけないネットワーク・プロジェクト」です。

足立 (以下敬称略): すばらしい展望ですね。まず一つ目からお話いただけませんか。

都市防災研究プロジェクトは今

森: 災害、防災、減災に関する知見である「災害知」をどのように社会に戻すかという『災害知の社会実装』がテーマです。プロジェクトの1年目で課題を明らかにし、2年目は仕組みを作り、3年目は本年ですが、仕組みが上手く継続するように具体的な行動を考えていきます。

足立: 昨年出版された【課題編】の展望にふれていただけたら幸いです。

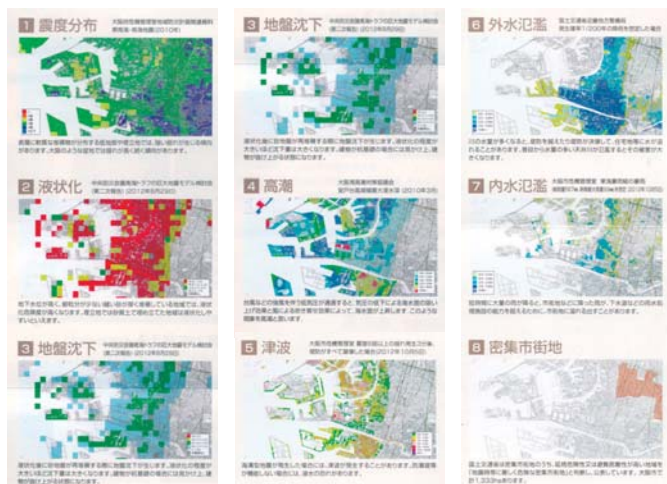
森: 大きく3部会「いのちを守る仕組み部会」、「広域複合災害部会」、「コミュニティ再生部会」に分け、大学のリソースをいかように防災に考えるかをテーマにしました。その3部会が東日本大震災支援活動の中から得た素材を25話にまとめ、【課題編】として出版しました。

本年は【アクション編】出版にあたり、半年間くらい議論しております。その中で具体的な課題としたのが、①新しい

情報通信技術を活かす、②災害弱者への支援をどうするのか、③コミュニティと一緒にやっていく、です。つまり、新しい情報通信技術を生かし、災害弱者を含むコミュニティが災害を理解し、安全を考え対応する力をつける事が『災害知の社会実装』なのです。その「災害知の社会実装」をまずやってみようということで進めています。先日も「防災まち歩き」をしました。

足立: フィールドワークとして現地をお歩きになって、地域住民や学生さんに説明しながら展開されているわけですね。

森: そうです。参加者の皆さんご自身が住んでいる場所で、何が心配で何が心配じゃないのかが、実は分かっていない。それを住民に戻そうと思って作った地図がこれです。



震度分布、液状化、地盤沈下など予想されるリスクをすべて載せています。自分の家はどこで、何が危ないのかが分かるようにしておいて、地域に持ち込みみんなに見てもらおう

と計画しています。

足立：プロジェクトの組織作りとしては絶妙ですね。

森：それは大阪市立大学10研究科、1プラザ1センターの縦割りの全部違う分野ですが、それを一つのフィールドで論ずると、まさに重ね合わせた総合的な議論ができました。研究成果が社会性を帯び、実質的にフィードバックできる仕組みができたといえます。東日本大震災がきっかけで、先端研究はしているが、自分の足元はどうなんだという問いかけで生まれました。足元をきちんと横断的に、最先端の研究を地域に戻すという『先端研究の社会展開』ですね。認知科学の学習理論のことで言うと“Learning-by-doing”といいます。今年度出版する本を、『コミュニティ防災リーダー』を育成するプログラムのテキストにもできそうです。できれば大学の授業の中に「防災学」のような形で、演習も含める授業として防災リーダーに認証する仕組みにつながると思います。地域のなかに災害知を組み込みコミュニティに理解してもらうのが重要です。その仕組みを作るため、防災研究協議会をたちあげる準備をはじめています。

足立：やっぱり先生はボトム・アップを思考していられるわけですね。現地の問題を、走りながらその中から構築される。

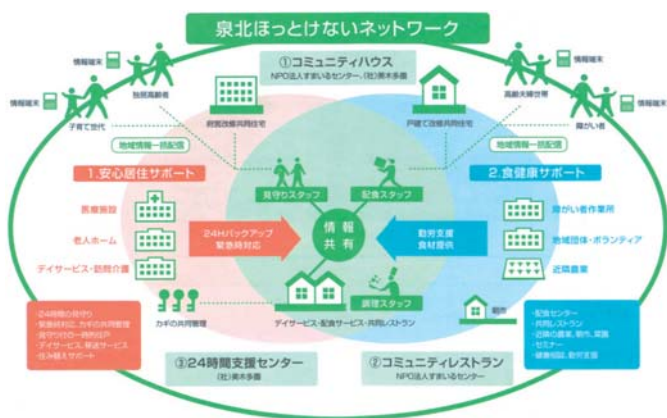
森：そうしないと結局は意味ないです。仕組みとして教育と地域貢献をいっしょにしていこうと言うことが今後の有るべきかと。

泉北地域のプロジェクトでは

足立：次に国土交通省プロジェクトの概略をご説明頂けませんか。こちら森先生が代表で、その経過もOMUPからご出版いただける計画と承っております。

森：プロジェクトの名前は『泉北ほっとけないネットワーク 新近隣住区』で、小学校区の榎塚台でやっています。当初から課題は「3つの整備、2つのサービス」と考えており、コミュニティーハウス、コミュニティレストラン、24時間センターが3つの整備です。最初の二つは大体できてきて、24時間センターを稼働しようとしています。2つのサービスというのは、安心居住のサポートと食健康サポートです。このプロジェクトにもいろんな先生方に入っていたり、分野横断的に取り組んでいます。

足立：しかも大学間の連携に発展している様相ですね。



森：ええ、たまたまですけどね。今では16のコミュニティサービスが始まっており、そのサービスを横断的に総括しているところです。その総括した内容をOMUPから出版しようとしています。

足立：ありがとうございました。

ところで出版自体もある意味では参加型社会貢献のようでして、その辺先生のお考えをお聞かせいただくと幸いです。

出版することの意義と出版会への要望

森：先ほどの話の続きになりますがOMUPから出した「いのちを守る都市づくり」はすごく意味があります。その出版作業によって、自分の専門が何であるかと相互の先生が見定めるんですね。自分の役割が何であるのかがつかめてきます。目次を作成すること自体が、研究の全体性を整理する貴重な作業になるので、本を作る意義というのは、横断的研究を進める上でかなり重要だと思いますね。昨年度、本を作ると最初に宣言したことが、功を奏しました。出版を目的に自分の専門性やリソースが何かと、個々に問いかけが出来るようになったと思います。編集者としてはその中の重複や落ちをみて、新しい分野の人を誘ったり議論すると、全体的なストーリーが出来てくる。つぎに読み手側に、どのように読ませるかという議論になります。個々の研究結果を、ひとつのストーリーの中でどのように生かすのかを考えると、研究が循環します。その意味で、本の役割はすごく重要だと思いますね。

足立：ただ今も、情報を地域の皆さんと一緒にし、それが一つの媒体としての書籍出版ということのお気持ちを吐露していただきました。終わりに私どもOMUPも、ささやかではありますが、大学のエクステンション部分に何かの貢献をしたいと十年來の歩みをしてきました。さらに、最近はe-bookなどにも対応できるよう努力しておりますが、何かご要望、ご注文はございませんか。

森：それはまさに今、防災でやっぴやいまして、コミュニティ防災リーダーの認証をe-learningでやりたいと思っています。まずは、開発中の自己評価ドリルを今度出版していただく本でまとめ、それをe-bookにつなげたいと思います。e-learningのシステムは、協賛していただく企業と一緒にやっぴやいけたらいいなと思っています。防災の自己点検をすると、なぜこれはこんな風になるんだと知りたくなります。そのリソースとして、e-bookのコンテンツを読んだり、実際の本を買って勉強する。そういう循環が出てくると思いますので、ぜひe-bookの事業にも参画いただきたいと思います。

足立：よちよち歩きの出版会ではありますが、そういう情報を活用していただけるようになりたいと思っていますので、またご要望がありましたら積極的にお申し出下さい。

森：どうか宜しくお願い致します。有り難うございました。

足立：どうも長時間にわたり、お忙しいところご協力有り難うございました。

(文責：児玉倫子)

※なお、詳細内容はOMUPホームページでもご覧いただけます。

自著を語る (7)

永遠の課題「リアリティの共有」に小さな灯をともし —『紛争と共感のリアリティ』の語るもの—

和田 安弘

1

本書が形を成す過程で私は一つのお願いをしました。それは、裏表紙に、第2章冒頭に出てくる「大きな白い馬」の話を載せていただくことでした。

大きな白い馬が私のもとにやってきた。

綺麗な澄んだ眼をしていた。優しく包み込むようなその眼は、私から不安というものを一掃してくれた。私はその馬に頼りきっていた。

その大きな白い馬が、ある日、元気を失ってうずくまっていた。狼狽えながら、介抱を試みるものの、見る見るうちに衰弱の度を増していく。万策つきて、それまで与えたことのない餌を差し出してみた。食べている。そして、ゆっくりと口を動かし、少しだけ戻った生気の中で、こう語った。「ようやく気づいてくれましたね。あなたがた人間と私たち馬では食べるものが違うのですよ。」

私は、ああそうだったんだと、深く深く納得していた。そうだったのかと、意外に思うのではなく。何でそんなことに気がつかなかったのか、言われてみれば当たり前ではないかと、馬の語りにシンクロするような一体感を味わっていた。

夢はそこで終わった。

実は、この夢に描かれていることが「リアリティの共有」のすべてなのです。本書の残りの部分は、それを際立たせるための飾りのようなものです。ですが、飾りもそれなりに大切な存在です。特に、人文科学系の著書は、一つの城のようなものですから、天守閣だけでは形が調いません。まずは堀があり、何何門やら何丸やら、通りに池に小さな林まで、そういうものがすべて揃っていることで、初めて見えてくるものもあるからです。

2

しかし、この体裁がせつかくの本丸から、多くの人々の目をそらすことにもなるのだと思われます。本書も例外ではありません。「はしがき」で本書の概観に出会い、「目次」を経て本書本体に到達すると、お堅い「序章」がまず読者の侵入を強固に阻みます。「法社会学と紛争処理論の系譜」と題されたこの序章は、法社会学（特に、その中の紛争処理研究）の広大な領域のどこに本書が位置しているのかを明らかにしていますが、一般読者の方々には、そんな説明も有難迷惑かもしれません。そういう場合には、大胆にここを読み飛ばしていただき、序章末尾の「結語」からそのまま「第1章」につなげていかれることをお勧めします。

第1章「紛争および紛争解決の枠組み」では、そもそも紛争とは何か、どのようにしてそれは起きるのか、起きてしまった場合にはどのような合理的対処の仕方があるのか、ということの詳細に述べています。紛争に対処する従来のやり方は、往々にして、テキトーに付き合うか、とことん付き合

うかの両極でした。前者は、合理的な紛争解決の道筋を無視した脱線に帰結することが多く、後者は、裁判所における訴訟等による形式合理的な「紛争処理」に成形されてしまうことが多いという点で、ともに問題を抱えています。本書が見ているのは、そのどちらでもない「紛争解決」の展望です。そういう第三の道についての理論的道標、それが第1章の内容になります。

第2章「リアリティの共有に向けて」は、第1章を受けて、それをさらに実証的に展開しています。どのようにすれば、「紛争解決」

の展望は開け、どのようにすれば失敗するのかについても具体的に述べ、20世紀末に行われたアメリカでの実際の制度展開と我が国における研究史に議論を広げていきます。

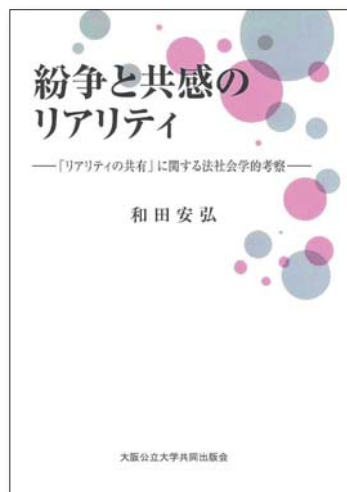
3

ここまでが本書の前半です。後半では、前半で述べた“理屈”の背後に回って、人間が生きていく上で、「リアリティの共有」を可能にする根幹的メカニズムはどのようなものなのかという問題を考察します。そのことを考えるための出発点は、本当に大切なことは何なのか、どうすれば人が幸せに生きていけるのか、ということです。第3章「リアリティの原点としての「愛」の理論」では、E・フロムの議論の核心を理解することを通じて、第4章「アダム・スミスの『道徳感情論』と紛争処理の接点」では、A・スミスの人間理解の基本を確認することから、本書の最大の関心事である「リアリティの共有」ということのもつ意味と意義を明らかにしていきます。

4

これが本書の概要です。最初に述べましたように、第2章冒頭の「大きな白い馬」の話が「リアリティの共有」ということのすべてを語っています。白い馬も元気を取り戻して、いつかは、人間の食べるものも受け入れてくれるようになるかもしれません。ですが、まずは「私」が「深く深く納得」できて、そうしてはじめて、その気持ちが相手の心にも届くのです。紛争解決に求められていることは、リアリティの「受容」ではなく「共有」です。何より互いのリアリティの違いを共有することが大切なのです。しかし、受容ができないときには共有も難しくなり、反対に自分の立場を正当化し、相手のことを評価し裁断してしまいがちになります。それでは百年待っても紛争の解決には辿り着けません。そうならないための「リアリティの共有」なのです。

私は、本書が多くの方々に広く読んでいただけるようになることを強く願っております。原稿を素敵な本に仕上げてくださったOMUPスタッフの皆さんには心より御礼を申し上げます。またそれ以前の、原稿作成期間にもたくさんの方々から応援をいただきました。個々のお名前を挙げることはいたしません、皆さん、どうもありがとうございました。



ISBN978-4-901409-91-9 C3032

A 5 判、上製本、258頁

定価：本体2,000円＋税

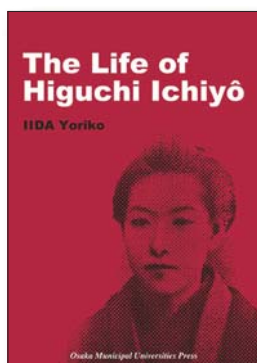
新刊書の紹介



OMUPブックレット No.36
現代社会を生きるキーワード
鈴木 利章 編
ISBN978-4-901409-92-6 C1336
A 5 判、90頁
定価：本体800円＋税



ケア
配慮論
中井 孝章 著
ISBN978-4-901409-93-3 C3037
A 5 判、上製本、298頁
定価：本体2,800円＋税



The Life of Higuchi Ichiyō
飯田 依子 著
ISBN978-4-901409-94-0 C1023
A 5 判、170頁
定価：本体2,500円＋税

第27回 OMUPサロンのお知らせ

前回に引き続き、JUNKU難波トークセッションとの共催により、下記日程で第27回OMUPサロンを開催いたします。和田安弘先生ご著書「紛争と共感のリアリティ」（発行所：OMUP）の出版を記念して、著者ご自身の思いを語っていただき、かつフロアの皆様との意見交換の場ともいたしたいと存じます。ぜひ皆様のご参加をいただけますよう、心よりお待ちしております。なお、弊会理事である小股憲明先生には、質問および対話形式で討論に加わっていただくことになっておりますので、ご期待下さい。

記

日時：2013年1月20日（日）14：00～16：00

その後、場所をかえて懇親会を予定していますので、そちらにも是非ご参加下さい。

なお、サロンは参加費無料、懇親会の会費は2,500円前後の予定です。

場所：ジュンク堂書店難波店 3階カウンター前特設会場
大阪市浪速区湊町1丁目2-3 マルイト難波ビル
tel：06-4396-4771

演題：著者が語る『紛争と共感のリアリティ』

演者：和田 安弘（大阪府立大学大学院人間社会学研究科教授）
小股 憲明（大阪芸術大学短期大学部保育学科教授・大阪府立大学名誉教授）

著書紹介（東販図書館向け情報誌掲載の紹介文）

21世紀の重要課題となる「リアリティの共有」とは何か。「紛争処理から紛争解決へ」という展望のもとに、「交渉と合意形成」および、前提となる「愛」と「道徳感情」の議論を視野に入れ、その実現可能性を探究する。

第26回 OMUPサロンの報告



平成24年10月28日（日）午後3時より午後5時まで、大阪難波にあるジュンク堂書店難波店の3階カウンター前特設会場にて「第26回OMUPサロン」が、ジュンク堂書店の開催するJUNKU難波トークセッションとのジョイント企画として開催されました。

今回の演者はOMUPよりゲオルク・フォルスター著『ニーダーラインの光景』を翻訳出版されました船越克己氏。聞き手はOMUP常務理事の足立泰二氏でした。ゲオルク・フォルスターの生い立ちから博物学者、啓蒙主義者、革命家と変遷する生涯を、スライド映像を交えながら解説されました。

また、旅行案内書としての『ニーダーラインの光景』の魅力も、現地で撮影された写真を投影しながらの解説でとてもわかりやすく、参加者は12名ほどでしたが皆さん熱心に傾聴していました。その後、演者を囲んでの懇親会が行われました。

（文責：金井一弘）



新入生と図書館をつなぐ『読ン得本々』



2012年新入生に薦める本 ポスター

「本」で迎えるような企画をと考えていたところ、広島大学教員による『大学新入生に薦める101冊の本』を書架で見つけた。「これを府大の図書館でも」と、前掲書で推薦されている図書のうち、図書館で所蔵している98冊を2008年に展示したのが「新入生に薦める〇〇冊の本」の始まりである。翌年からは、図書館委員会の先生方に図書の推薦とコメントをお願いして、毎年推薦図書リストの作成と図書の展示を実施している。当初は手作り感あふれるリストであったが、2011年からは、大阪公立大学共同出版会、大阪府立大学生活協同組合との共同企画としてパンフレット『読ン得本々：「新入生に薦める100冊の本」より』を作成していただき、新入生や関係教員に配布して好評を得ている。期間限定の展示だけではもったいないと、今年度からは学術情報センター図書館1階に推薦図書を常設するコーナーを設置した。

この企画は新入生に好評で貸出率も高いが、大学院生や教職員、府民利用者の方にもよく利用されている。先生方には「専門分野にこだわらずご推薦ください」とお願いしているので、不朽の名著から話題の新刊図書まで幅広いジャンルの本が推薦され、そのコメントはとても興味深い。先生方の学生時代のエピソードや、新入生に対する思いが綴られた『読ン得本々』は、薄くて小さいながらも、学生と本との出会いの場としての図書館を応援してくれる貴重な資料である。

(文責：赤碕久美)



新入生にとっての大学図書館を魅力的なものにし、少しでも図書館に足を運んでもらうにはどうすればよいのか。大学図書館で働く者にとっては、重要かつなかなか難しい課題である。図書館は、学習スペースを提供するという役割も持っているが、やはり「本」との出会いの場である。新入生を大学図書館らしい

新 顔 紹 介

OMUP編集 森ノ木 徳信

昨年11月からOMUPで編集を担当しています。編集歴25年の62歳オッサンですが、これから新たな気持ちで、皆さまからいろいろご教示いただきながら、いい仕事をしていきたい、著者と読者の心を結ぶ、いい本づくりのお手伝いをさせていたきたいと思っています。



大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加を得て、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けられないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

などを行っているNPO法人です。参加を希望される方は、下記事務局へお問い合わせください。

〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1

大阪府立大学中もずキャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会 (OMUP) 事務局

電 話：072-251-6533 ファクシミリ：072-254-9539

e-mail：omup@hs.osakafu-u.ac.jp

U R L：http://www.omup.jp/

入会金：一口一万円 (終身会費)

振込先：三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編 集 後 記

昨年後半より事務と編集に新しい仲間が加わり、会員の皆さまの本作りにより充実した体制でお手伝い出来るようになりました。日進月歩で変貌しつつある出版界に遅れをとらぬよう日々精進する所存です。本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

(児玉倫子)